

# パスカルにおける

## absence の意味

田 辺 保

「人間機械論」(L'Homme-machine 1747)の著者ラ・メトリエは、同書の中で、パスカルの深淵について、次の有名な叙述をした。

『……集会の場合や食卓についている時、パスカルはいつも左隣に椅子を積み上げておくか、それとも誰かにいて貰わなければならなかった。それは、恐ろしい深淵のみえるのを防ぐためであり、いくらそれが錯覚であることを知っていても、時にはどうしても落ちるような気がしておそろしかったのである』邦訳、杉捷夫氏訳、岩波文庫版 P. 57)

この逸話はもともと、アペ・ボッロオの手紙に端を発するものであるが (Lettre sur divers sujets de morale et de piété Paris 1737, t. 1, P. 206)、ラメトリエのこの叙述によつてひろく知られるにいたり、後にはヴォルテール、ボッシュュ、レリュなどもそのまま利用している。しかし、たとえばサント・ブーヴなどは『たとえこの話が本当たったところで、単に肉体的に感じただけのことで、パスカルはそんなものに欺かれはしなかった』(Sainte-Beuve (Causerie

du Lundi, le 4 dec. 1854, t. I, P. 192) とつて否認しており、今日では物語自身の真摯性は、例のヌイイ橋上の事件などと同様に、一般に受けいられていないようである。(この逸話についての考証は、Z. Tourneur, Une Vie avec Pascal, Vrin, 1943, P. 85-88参照)ともあれ、真偽のほどはさておき、この物語は、「パンセ」の中に見出される人間の状況の悲惨さに関する描写、私たちを深淵の前にひき出し、目ざいを覚えさせるようなあの描写と、どこか照応するものをもっているように思われる。(レオ・シュエストフによれば、この物語は、「パンセ」第 183 の例の目かくしをして断崖にかけこむ描写に起源が求められるとの由であるが、私は第 72 次の個所により適切な根拠を見出し得ると思う。『私たちは、かたい地盤と、窮極的な不動の土台を見出し、その上に無限にまでそびえる一つの塔を築きたいと熱望している。しかるに、私たちの一切の根底はひびき割れ、大地は裂けて、深淵が口をひらく。——』「パンセ」断章番号は、慣用に従い、ブランシュヴィック版のそれを用いる。トゥルヌールやラフヌマ版との照合には、ラフヌマ三冊本中の

documents (Ed. du Luxembourg, 1951, t. 3) に出ているコン  
コルダンスなど参照。) といったパスカルにむかつて、彼が余りにも『人間を醜悪な姿にお

いて見せしめ、人間すべてを悪しきもの、不幸なものとして描くこ  
とに熱中している。との非難をさしむけた者は、これまで一人や二  
人ではなかった。たとえ『この崇高な人間嫌いに対して、あえて人  
類の味方になろう』とのポーズを示したヴォルテールなどその第一  
人者であった。(Voltaire, Les Remarques sur les Pensées de  
Pascal, dans les Lettres Philosophiques, 1739) パスカルの人間価  
値批判が、もし人類にむかつて踏々とあびせかけられた罵言にすぎ  
ないのであれば「パンセ」の作者の深淵を前にしての身震いも実に  
滑稽なうつろなものに一変してしまふ。しかし、ここにはやはり私  
たちの実存の根底をつねにゆさぶりとつゞける何ものかがかくされて  
いるのではないだろうか。パスカルの中に「敵」を見出したルフェ  
ーブルのような人でさえも、その相手が「生命の敵、それ故に今も  
尚生きている敵」であり、『パンセ』のこれらの文章、殊に人間の状況  
と戯戯に関する文章は、今もショックを与える』と告白せざるをえ  
なかつた (La Conférence de H. Leblère dans «Blaise Pascal,  
Thomme et l'oeuvre», Ed. de Minuit, 1956, p. 197)。「パン  
セ」が、単に観念的抽象的な所産でなく、<sup>イデオロギイ</sup>まさに現実の哲学である  
ならば、当然その描写の中には、今も私たちをゆり動かす、事実と  
直結した感動がなくてはならないはずである。パスカルのアクチュ  
アリテは、いったい何に根ざしているのであろうか。少くとも、多  
くの人が「パンセ」における否定と断罪の調子に焦立ちを抑えよう  
のない理由は何であらうか。J・リュッシュのいうように、「パンセ

」の弁証論はキリスト教の証明をめざすものでなく、無信仰者をゆ  
さぶり動かすための巧妙な戦術だけに終始しているのであろうか  
(J. Rassinier, La Foi selon Pascal, P. U. F., 1949, t. I, P. 33  
〜53)。たしかにパスカル自身「一の断章において」

『かれ(人間)がうぬぼれるなら、わたしは、かれをいやしめ、  
かれがへり下るなら、わたしはかれをもてはやす。

そうして、いつまでもかれの言に反対し、「自分はわけのわからな  
い怪物なのだ」と、かれがとうとうさとるまでにはたらしめる。』

(420) と書いてゐる。ここにも人は「『forgeuxに』」<sup>me-</sup>  
chantな感じ(桑原武夫氏)だけを感じるのであろうか。今一度、

私たちはパスカルが人間生活の上にかげられたマスクを剝がさざる  
をえなかつた理由を考えてみたいと思う。彼が、私たちの目に是非  
でも映せしめようと努力している「欠如」(Absence) の実態が  
いくらか構想されたものであることは否めないとしても、そこには  
やはり唯一の真実への指示がかくされていることを検証してみたい  
と思う。ラ・メトリエの伝える深淵の逸話は、『想像力、即ち脳葉の一  
片における異常配置の怖しい結果』(邦訳 P. 9)にだけ帰せられて  
しまふべきものでなく、パスカルが具体的に、現実はこの人間の状  
況の底に見た根源的欠如の<sup>アンパンス</sup>様相を、的確に象徴し、証言するものな  
のである。

(一)

まず最初に、パスカルは人々をして、「自然にしたがつて、自然  
を」(457)ありのままに眺めさせようとする。『私は、いたるところ

ろに晦さだけしか見ない。自然が私に見せてくれるもので、疑いと不安の種にならないものは一つとしてない(223)。これはキリスト者の目が見たものではない。パスカルは無信仰者の口をかりて語っているのである。「パンセ」を細かく読んでみると、中には対話の方法が縦横に駆使されている。代名詞を表面的に一見しただけでは、ある一節が著者自身の見解をそのまま示したのか、或いは対話者の見地を表明したものが容易に決定出来ない場合が多い。しかし、この一節はあきらかにパスカルが無信仰者の立場に身を置いてなした告白であり(さらに194, 205等参照)、私たちの現に生きる世界において『否定するには余りに多く、確信するには余りに少いこと』を発見したことの直接的な自然なげきなのである。自然は神の喪失をしかあらわさない(411)。だからこそ、自然を用いてされる神証明は無益にして、得るところがなら(549, 556から572)~4, 428, 543)といわれるのであり、<sup>ディニイユ</sup>自然神教は無神論と同じほどにキリスト教から離れている(556)とされるのである。反対の立場こそが真理をあきらかにする(254)といわれる如く、実はこの欠如への開眼こそ思想転換の契機であり、誤れる見地⑤への反省をもたらず。パスカルが人々に与えたこのネガチヴの眼鏡こそ、まさしくキエルケゴールのいわゆるソクラテスのイロニーの行使といわなくてはならない。パスカル自身の残した弁証論のプランによると(60)、その第一部は「神なき人間の悲惨」であり、『自然の腐敗を、自然そのものによって(示すこと)』である。彼はまず、もつとも卑近な日常生活の諸事実の根底に *vanité* を剔抉することからはじめる(61)。芸術、学問、法律、正義、美、恋愛、諸權威等、すべての人間の価値は、その無根拠性の故に否定しさらされ、人々は否応なく

人間存在の根底に横たわる不安の前につき出される。この世の空しさをさとらない人は、まさにその人自身が空しいのである。(124)と追いつめられながらも、人はなお自己の生の本質的な虚無性を見ることが拒む。かくして、この虚無性を掩い、これを見ないで済ませよう精神を脇へずらす(*divertir*) (165)ものこそ、*戯戯*(*divertissement*)と呼ばれる。戯戯は、人間の日常的あり方の現実であり、真の生を隠すカヴァーである。人は深淵を見ないために、好んで自発的な錯覚におちこむ。だから、人間の生とはたえざる幻影にすぎない(100)。パスカルはさまざまな方向から、何度も私たちの生の根底に鋭い批判を加え、私たちの目にあの深淵をあらわにしてみせる。私たちが真に生きていると思いつこんでいるものが、ついに真の生ではないことをさし示すのである(386)。*La vie est absente. Nous ne sommes pas au monde.* (A. Rimbaud) 私たちが、他人の空しい評価にのみ関心していること(147~154)現在の事柄に真剣になることなく、今は存在しない過去や未来のこととにのみかかづらっていること(172)、さらに、人間的な愛の本質は、ただ自己のみを愛すること(100)であるが、その自己とは欠陥にみち、不完全なものにすぎないにもかかわらず、さいごまで自己への執着をたち切れず、一切の混乱の原因をなしていること(17)、この容赦ないパスカルの急迫によって人はついに自己の生の根源的な欠如を認めざるをえない。この盲目の状態には、何かしら自然以上のものがあり(194, 495)、奇妙な錯倒があり(108)、これこそまさに墮ちたしるし(437)である。ここまで導いてくることと出来るならば、まさにパスカルにとって思うつぼなのであるが、実は、私たちがここにも、彼の今一つ深い配慮、——即ち背後

の思惟(*pensée de derrière*, 336, 337)が働いてゐると知らなくてはならない。レンブラントやジョルジュ・ド・ラ・トゥールの絵を支配する暗黒の影の底に、一條の光が包みかくされているように、パスカルが世界の根底に示した「欠如」は、それが深く徹底的であればあるだけ、すでに超「自然」に触れているのである。『もし暗さがなかったら、人は自分の墮落に気がつかなくなつたであらう』(336)、『あなたの中に何もかも期待しないよにこつて、あなたはそれを期待すべきである』(337)。かくして、一切の地上の根拠を失ひ、疲勞の極(423)、人々の胸に期せずして生れてくるのは切々たる呻きであらう。『呻き(337)求める人のみを是認する』(337)といわれる時、呻きの方にこそ出発点があるのであつて、これこそ「自分の根底にそれ以上の光をもたぬ」(194)ことの赤裸な表白でなくてはならない、パスカルは、悲慘と盲目の中に取残され、しかもたえず自己の虚無を蔽おうとのみ試みる人間の愚かしい営みを非難したが、自己の状況に絶望し、何らかの真理のイメージ(338)が見当たらないものとたずね求めるあり方は、何より人間的な態度として是認したのである(357)、『求めてゐる無信仰者は同情すべきである』(190)呻きこそ求めることへの衝迫となり、欠如の認識こそ眞の存在を希求するパッションをもえたとしめる。畢竟、パッションとは、自己の実存を何らかの欠如と感じた主体が、与えられた苦痛を受動的に耐え忍びつつ、存在回復の欲求にもえるあり方なのである。呻きによつて生れた求道の情熱は、やがて大文字の *PASSION* に到達せざるをえない。パスカルにおいてキリスト教の弁証とは、何より自然性の完全な墮落の証明であり、同時にその墮落をあがなう神の力としてのキリストの救済への指示である。自然の墮落を正しくみること

が懐いの信仰へとみちびくのであり、自己と世界との欠如のまつたきものであることの認識がイエスキリストの現存をさし示すのである。だからこそ、何より現実的にイエスキリストのほかに神を知ることが不可能といわれるのである(347)。(R・ラコンペは、「パンセ」の人間の悲慘と、それを回復するものとしての贖罪に関する描写の部分に余り固執するプロテスタント的解釈を、信仰絶対主義的傾向として斥けているが、少くも第二部の歴史的証明の部分も、イエスキリストの恩寵への絶対的な依拠を前提としないかぎり無意味なのではないだろうか。R. Lacompe L, *Apologetique de Pascal*, P. U. F., 1953, P. 307~8)

ところで、既に求めることすら、神の恩寵の働きによるのではなかつたらうか。「イエスのミステール」(553)には、『心を安んぜよ、お前がわたしを見出さなかつたならば、お前はわたしをたずねはしなかつたであらう』と書かれている。イエスキリストによつてのみ、私たちは自己の墮落と悲慘を見ることが出来るともいえるのである(347~8)。墮落の欠如の認識の窮極には、既にこれ程の悲慘にとりかこまれ乍ら、なおも生かされて、それを眺めることの出来る驚きがつらなつてゐる。イエスキリストなくして世界は存在しなかつた。(555)といわれるのは、そこにおいて当然の帰結であり、何より具体的な結論であつた。(さらに、この一見不可解な言葉が、実は歴史の形而上学的基础確定し、そのダイナミックな発展をゆるす動因となるのである。R. 深瀬基寛「批評の建設のために」昭三一、南雲堂P. 163)イエスキリストなくして、世界は地獄のようであつたらう(556)。深瀬基寛氏のいわれたように、パスカルは、地獄はないという現代人のカテゴリーを、……哲学的に打破

……」(同氏著「エリオットの詩学」昭二八、創元文庫 P.18)したのである。(ミトン)は人間の本性が墮落しており、人間が誠実に相反するものであることをよく知っている。しかし彼は、……その理由を知らない』(438)。パスカルはまさにこの理由を知っていたのであり、これこそ彼の所持していた「時計」(5)であり、即ち、『墮落したが、あがなわれている』(503)というキリスト教的原罪観であった。ヒューマニズムの疑似カテゴリーを批判した T. E. ヒュームがラジウムよりも貴重な大発見物として、真のカテゴリーの位置にすえたものがこの原罪観であった。ヒュームにいわせれば、原罪観に比べるなら、世に喋々されている神や自由や靈魂不滅などは一切副次的な観念でしかない事柄なのである。(T. E. Hume, Speculations, 邦訳「ヒューマニズムと芸術哲学」長谷川敏平訳、昭二八、宝文館、P.63)これより大切なものは何もない。しかし人は、これのみをなびざりにしている。(194)とパスカルの書いた。この原罪観の背理こそ、彼が証明しようとした当のものであり、逆は彼は、この原罪観の光によって世界を内側より解釈し、描写したのであるといえる(430)。「見ることをのぞむ人に光は十分」(293)なのである。『神学者たちは罪と呼ぶ。パスカルは、より具体的に、しかも、より衝撃をあたえるようなやり方で、不幸、失敗、絶望、悲惨、愚戯などと呼ぶ。彼は、(罪について)具体的な、天然色の、生ける、おそるべき光景を私たちのためにつくり上げた』と書いた、このアンチパスカリアンは、炯眼にもパスカルの本質を見ぬいたのである(H. LeFebvre, *ibid.*, P.222)

動物において自然であることを、人間にあっては悲惨である(59)と認識することが、人間の偉大と呼ばれる。パスカルが人間の状況

を、「廢位された王」(398, 409)という比喩で表現したのは、人間が思考によって世界を規制し得る力をもっていることの認容である。ただし、彼は人間固有のものとして残された自然的な理性の能力(398)をそのまま認めているのではない。彼が、考える存在としての人間の偉大という場合にも、必ず「考える葦」(347-8)、「考える肢体」(437-4, 438-9)といった句にもうかがわれる如く、イエス・キリストの無償の恩寵に支えられ、イエスを中心とする教会の交わり(357-8)に入れられてのみはじめて可能であることが前提されているのである。そして、肢体が肢体であるくせに、体からはなれて独り立つことが罪とされるのである(438)。しかも、*Penser* は恣意的な自由な思考でなく、何より正しい秩序と状況の認識であり、「しかるべく考えること」(*Penser comme il faut*) (146)「よく考えること」(*Ben penser*)」(347)とは、即ち人間の現におかれている真実の境位を適正に、的確に知ることには外ならない。(ラフユマ版の配列では、「考える葦」(347)の断章の二つ後に、51の『……あなたがそれを期待すべきは、あなた自身からではない……』の断章がつづいている。また、この二つの断章の間に置かれているのが例の「無限空間の永遠の沈黙」(206)のパンセである。J. リュッシュエによれば、この一句もまたパスカルが不信仰者に託した絶叫である(J. Russer, *ibid.*, P. 8-10)とのことであるが、最大と最小の二つの無限の中間に吊り下げられたものとして、——この断章にも、ラフユマでは「考える葦」の直前にある。——この無限空間のただ中であってただ独り目覚めつつ、沈黙の中にその「幾何学的自然」の深さを眺め得る眼をもつことが出来るのは、やはり救われた科学者にのみ可能な態度ではないだろう

か。これ程のおそるべき深淵をあえて見るとをゆるされるところに恩寵の深さを思わしめられる。)とすれば、欠如に対して目がひらけることこそ、既に贖罪の恩寵に浴しているのである。イエス・キリストへの信仰を背景にして、パスカルにおいて、描かれた欠如はまったく実体的なもの (substantiel) であったといわれる。偉大と悲惨、墮落と贖罪、パスカルが何度もいつているように、これら二つは必ず相即するものであり、一方だけを知ることが不可能であり、また危険なことなのである。こうして、まったく Absence の現存にふれることはすでに真の Présence を期待せしめるのである。それに反して『無 (vide) の存在しないごとく』(170) 慰戯に走り、(子をなくした男が猪狩りに夢中になっている悲惨さの示すように、139, 140) むなししい幻想を以て自己の虚無性を蔽おうと絶望的な試みに走るかぎり、人は永遠にミゼールをはなれえないといえる (194, 200)。

#### II

Fr. 693は、眠っている間に荒れ果てた離れ島に連れ去られた人の比喩を用い、人間の現状についてなまなましい描写を展開している。私たちは、これがアポロジストの巧妙な芸術的技巧、劇化による描写というだけにとどまらず、どこか現実の体験が生み出したもののような具体性、迫真性の匂いを感じとる。事実、『パスカルが認める唯一の真理は、経験的真理であり、心と手による真理である。窮極の真理は、手に触れられる (palpable) のである』(J. Demorest; Dans Pascal, éd. de Minuit, 1953, P. 20) といわれ

ているように、彼はいつも抽象の中におちこむことを避け、直接目にふれ、手でさわることの出来る現実から出発したのである。世界の根底に「欠如」の存在を認めることも、彼の場合何より生々とした経験を通りぬけてきたものなのである。

私たちはまず、物理学者としての彼の基本的な態度に注目しよう。姉ジルベルトは、『弟は子供のとき以来、あきらかに自分にとって真実と思われることだけにしか従わなかった。そこで人が、十分な理由を示してくれない場合には自分自身でそれを探求した』と書いている (Vie de Blaise Pascal)。精神にあらわれるかぎりの明証と確実を出発点にするかぎり、デカルトとパスカルは同じ立場に立つようであるが、前者が自我の意識における観念的な自明性を拠り所としてアプリオリの推論による抽象的な思考の構築を目ざしたのに対し、パスカルはつねに現実の諸事象そのものが内包する否定的矛盾の契機を観察することを怠らず、必ず事実の実験 (即ち否定的媒介) による確証を以て裏付けて行つたのである。それ故予め定立されている形而上学的本有観念の命題を以て無理やり事実を解釈しようとするのでなく、厳密な実験の結果あらわれてくる事実をそのまま虚心に、(自己否定的に) 受け入れようとする態度こそパスカルのものであったといえる。パスカルの実験的立場が、つねに観察する当の主体の柔軟な感覚、事実への服従にむかつて打開された態度を要求するものであったことは見逃せない重要なこととと思う。

一六四〇年十月、ピエール・プティは、当時ルーアン在住のパスカル家を訪問、メルセンヌより聞いたトリチェルリの真空実験追試の失敗を語った。ディエップへ赴いたプティの帰途、直ちにプレー

ズは父エチエンヌと共に実験を試み、見事成功し、彼の科学的探求の新しい出発点に立った。この実験の結果出現した四ピエガラス管内の見かけの空所を見た途端、パスカルは直ちにそれを真空であると判断を下した。デカルトはもともと真空の存在を理論的に許容せず、見かけの空虚にはただ自己の関心する物質が存在しないだけのことと、別の微細な物質（たとえばエーテル）が充滿していると考えた。絶対的な空虚を想定することは自然の中に真の無を持込むことであり、『自然は真空を嫌厭する』故に、無は存在するはずがないのである。パスカルにとって、この空所に何も存在しないことはあくまで感覚の明晰判明な判定であり、如上の独断的な命題によってここに何らかの微細な物質の存在を仮定することはまったくの想像にすぎないと考えられた。『……というのも、このようなことは、もともと想像の領域に属するのであり、この想像の力によれば、最大なものでも、小さなものの場合と同じように、それを生み出すのに何の苦勞も年月も要しないからである』（フェルへの手紙）。パスカルにむかつて異論を立てるにいたった、いわゆるプレニストたちとの華々しい論戦を経て、あくまで事実をふまえ、事実の上に立てられた認識、感覺的、実証的な認識の方法は、明確に意識されるに至った。パスカルが、真空 (vide) —— 無の存在をその感覺によって確信するにいたったという事実は、何より興味深い象徴といわなくてはならない。vide の存在は、物理学の領域においてだけでなく、彼の実存的体験の次元、生の立場においても、虚無そのものの存在として信ぜられたのである。（パスカルが真空を認めるにいたったのは、たとえばガッサンディに近い立場からなされたとの説もあり、科学的見地、哲学上のカテゴリーの問題などから、なお考察を要す

点も多いのであるが、今は一応、一の独立した別の次元の認容という点だけを指摘しておきたい。)

一六五三年末頃から、うわべは社交界の生活を楽しんでいたブレーズの魂は、既にはげしい渴きを覚えていた。彼は決して科学的な仕事に倦いたわけではなく、緊張の中に仕事を進めていたのであるがにもかかわらず科学への没入も、人々との交際も、彼の心に一たびひらいた空虚を埋めることは出来なかつた。私たちは、どのような外的理由によってこの不安におとされたのかを見定めることは出来ない。モオリヤックは、パスカルの真の友が少なかつたことをベシヴアリエは、病気の悪化をその一因にあげている。ともあれ、彼は真空実験をくりかえしながらも、『真空はそのとき、彼自身の心の中により以上に存在し』た』(E. Caillet; Pascal, Westminster Press, 1945, p. 102) のである。一六五四年九月以来彼はしげしげと妹ジャックリーヌをポールロワイヤル修道院にたずね、その心のうちを打明けた。世のすべてのものを離れたという望みにもえつつも、神の側からもまったく打捨てられているのではないかという心の懊惱、ジャックリーヌは、兄の告白を聞いて深く心を動かされたという。いずれにせよ、パスカルが感じていたこの心の空虚も、実は神が新しい光を彼に与えたまい、それによって見ることが出来たものであつたことを忘れてはならない。回心の心理的過程を反省した、この当時の記録「罪人の回心について」の中にも次の一文が見出される。『神が真に御霊をもてのぞみたもうた人の魂に、まず授けられることはといえは、まったく世の常でない認識と展望であつて、それによつて人は、物事と自分とをすつかりちがつた具合に見るようになるのである。この新しい光は、人に恐怖

をもたらす。』——こうして暗夜の中を彷徨してきた彼の魂は、やがて十一月二十三日夜のあの驚くべき「メモリアル」の体験によって決定的回心に達し、彼は「歓喜の涙」とともに生ける神イエス・キリストとの邂逅に直面する。この火の体験こそ、それ以後のパスカルの信仰の歩みを決定づけたものであるが、この瞬間にいたるまで、彼がたどりつづけた深い絶望の段階を私たちは見失つてはならないと思う。恰も、ノエル神父のような人たちが、見かけの空所に純粋空気の如き物質が満たされていると仮定したのに対し、パスカルが『真空の存在を事実の名において確認』（ブトルウ）したように、「愚戯を以て人生の虚無を満たすことが出来たと妄想している人々、無益な学説で他人を欺く哲学者どもに反して、彼は文字通りに自然と人間の墮落の結果としての無の存在を経験しつくしたのであった。「パンセ」の中の人間の悲惨に関する実感をこめた描写は、勿論彼自身のくぐってきた体験と無関係でありえない。彼は *patience*（実験——経験）を経た事実をしか信じなかった。「パンセ」の描写は、彼が無信仰者に託してのべた抽象的観念であるより前に、彼個人の魂の告白なのであり、生きたヴィジョンの表現であった。パスカルにとって、欠如はあくまで実在として体験されたのであり、彼は「手と心とを以て」それを感じてきたのであった。深淵の逸話が創作されたのは決して偶然ではないのである。そして、それ故に、この欠如をおおうものが『福音書に教えられた道によってのみ見出される』（メモリアル）神のほかにないとの彼の告白は、一そう切実にひびくのである。

パスカルは、彼自ら生きたレアリテを「パンセ」の構想にあたって、そのまま作品の世界にイメージとして投影する。彼が世界をイメージとして描くにあたって、みちびかれた源流の一つとして聖書の存在を否定することが出来ない。「パスカルと聖書」という主題は既にレルメによって浩瀚な研究にまとめ上げられているが、彼は人間生活の根底に見出した欠如とその回復の方途の具体的な教示を聖書の中のみ見出したのであった。ただ一つのイエス・キリストという中心に、すべての事柄が集中し（*centro*）、一切の事件、事象がこの中心を指示するものとして配置される聖書のあり方が、パスカルに原罪観の意味を教えたのであり、さらに『聖書の啓示が心情としての在り方を規定し方向づけて可能にしている』（森有正氏）といひ得る。逆に、この心情の秩序に属せしめられようとする主体の決断と、服従の行動のみが、聖書の世界観のもつ巾とひろがりにおいて、今一度自然をかえりみることの出来る目を与えるものなのである。一たび世界の中に見られる人間の悲惨が実はそれ故に贖いの大いさを指示する（*redem*）ものであることが明らかにされたならば、次には「神と共なる人間の至福」が、つまり一の回復者の存在が「聖書によって」（*per*）教えられなくてはならない。「パンセ」の第二部は、聖書の歴史的根拠に基いてイエス・キリストの現存を証明することを目的とする。

ところで、聖書そのものも自明の書物ではない。そこに描かれる預言や奇跡は、信じさせるよりもむしろ顧かせるためにある（263, 470, 564, 568, 825）。聖書は『コンキヤンス・ブック（常識の書）では

ない(フットサイス)のである。聖書の中には『(私たちの)目をくらますものと、目をひらけるものがある』(53)。肉によるユダヤ人が蹟いたのはマホメットが成功したのに、イエス・キリストはほろびたまわねばならなかった』(59)ためである。しかも、この十字架の狂愚のみが信仰をもたらす(57-3)といわれる。これは明らかに不條理というべきである。聖書もまたそれが人間のことばで書かれているかぎり、肉の眼には晦さ<sup>カクシ</sup>と愚かしさが見出すことが出来ない。心の割礼が必要である(63)。しかも聖書の描写は、ことばを媒介とするかぎり、私たちの現実の理解力<sup>サンカク</sup>に相応する秩序においてしか語ることが出来ない。『私たちの魂は体の中に投げ入れられている』(23)といわれているように、現実の秩序が体の秩序にとどまるかぎり、より高次の秩序を映す方法には象徴を用いざるをえない。実際の事物とポートレートとの関係によって類比されるごとく(67)、レアリテの象徴としての表現こそイメージであり、イメージは不完全な言語によって、より高い秩序と関連せしめつつ、「見えないもの」を映すことである。『聖書は、パスカルに、イメージの方法によって見える世界を見えない世界に結びつけることを教えた。象徴の受肉化によって、人間の超自然的な生命を表わすことを教えた』(J. Demerest; *ibid.*, P. 85)。ところで、この象徴が、absence と presence をともに含む(67)といわれているのである。まったく明らかなレアリテの世界において、absence の存在は許容されない。現実<sup>リアリテ</sup>に何もかを欠いた世界、——つまり、私たちが単に quelque chose にすぎず、tout でありえない世界(72)、——においてのみ、晦さ<sup>カクシ</sup>がなおも残存するのである。より具体的にいえば人間の知識は、その身長に<sup>タカサ</sup>応じ(208)

私たちの体が自然の拡がりの中において占めている地位(72)に応じて限定されているのである。しかも、アビラの聖女テレサのいったように「人間は、人間であるかぎり身体をもっていることを忘れることは出来ない。』absence は、体の秩序において止むをえざる条件であるといわなくてはならない。点をいくら加えても線にならず、線をいくら加えても面にはならないからである(「数の累乗の和について」参照)。むしろ、このような晦さ<sup>カクシ</sup>と愚かしさの中にあることこそ、宗教の真理を示すもの(56)かもしれない。しかしそれは私たちが絶望させるためにあるのではなく、かえって『(選ばれた者たち)をへり下らせるために晦さは十分にある』(57)といわれているように、それによって「教える」ためでなく「申しめる」ためにあるのである(23)。この原語《*chauffer*》は、ラフュマ版の説みに従ったものであり、ブランシュウィック、トゥルヌールは、《*chauffer*》と解している。ヴァールは、ラフュマの説みを《*bizarrerie*》と評したが、ラフュマは「これに対し《*humilier*》の意味が使われていると答えており、私もコニエ師の説くように「人間が神の前で自己の無を認めること」という意味で、この読みに賛同した。』*Cahiers de Royaumont*, No. 1, B. Pascal, *Thom. et Ioeuv.*, *ibid.*, P. 452) 自己を卑しめ<sup>カクシ</sup>と<sup>カクシ</sup>のみ、私

たちは神を認めるのである(238)。自己否定こそ宗教への接近の途であり、自己の欠如の全き認識が聖書の真理を反対に明らかにするのである。聖書解釈は、解釈しようとする主体の在り方の問題(森有正氏)といわれるのはこの意味であらう。

『神は、その選民の希望をかたくするために、どの時代にも希望のイメージを彼らにお見せになった』(644)。そして、旧約の各物

語がイエス・キリストの来臨の事実によって光をあてられる符号である(69)。さらに、聖書のイメージのあらわしている記号はその中心にあり、当の聖書の伝えるイエスの十字架によってまったく明らかになるのである(740)。この図式は「パンセ」の構造と同じである。この新しい秩序を見ることの出来る眼こそ、「心の眼」(793)であり、これは上よりの靈感によって愛の秩序(388)に入れないかぎり持つことが出来ない。『愛の外なる真理は神ではなく、そのイメージである』(582)。『愛にまでいたらないものはすべて象徴である』(60)。『そのときまでは曖昧さがつづく。しかし、そのあとはもうつづかぬ』(690)。

欠如の状態に適当な表現形態が象徴化であり、聖書と同様に、イメージによって「見えないもの」——「隠された神」——をさし示そうとするパスカルの文体も当然その性格をになう。『なぜなら、目的はただ一つしかないので適切なことばでそれを示さないものはすべて象徴だからである』(670)。人間の現状の欠如を(同時にそれを回復するものへの信仰と共に)、ヴィジョンとしてもつていたパスカルは「パンセ」の表現において、媒体としてのことばをより高き秩序をさし示す記号としてのみ奉仕せしめるのである。『ことばが象徴であるということは、ことばが presence の中における absence であることを意味する。ことばは体と同じように、私たちの原初の本性のしるしであり、むなししい痕跡なのである。ことばが、ことばであってアクトでないという事実によって、ことばは精神から愛への無限よりもさらにかけはなれた距離を象徴する。それによって、ことばは私たちの悲惨と偉大を同時にあらわにする。』

(Th. Spoerri, dans B. Pascal, l'homme et l'oeuvre, ibid., p.

409)。

「パンセ」のスタイルの研究がさいごに提唱されてなくてはならない。パスカルのもっていたヴィジョンは、言語の領域においても、的確なその反映をもっているのである。パスカルのイメージの現実性は、それに見事に照応するスタイルの完成をまつて、その受肉を果し得たといえる。抽象的觀念の域にある精神内容を、自らその手を用いて一の具象的な機械として表現した計算機製作の例にうかがわれるごとく、パスカルにおいて、あらゆる自己表現は必ず、内的ヴィジョンと、メディアとなる道具乃至材料の完全な同質性、同一の振幅によって特徴づけられる。パスカルのスタイルもつ密度と、物質的な堅さが指摘される所以である。状況の absence は、文体それ自身にも危機的反映をもっている。パスカルにおいて自然は神のイメージにすぎない(580)。自然の中に生を営む人間にとってイメージのあり方は固有の本質といわなくてはならない。アポロジを企図するパスカルの筆はイメージ形成の方向へと運ばれ、まさにぎこちない不完全な試みでありながら、根源より眺められた世界の欠如の構造をイメージとして写し出そうとする。「パンセ」が、人間から神への道を意図するものであるかぎり、必然的に何らかの欠如の性質をになわなくてはならない。しかも、それが本質的な存在者の証言であろうとする目的をもつことにおいて、現実をありのままに見ようとする極限の誠実さを要求される。こうして「パンセ」のスタイルは、二重の absence をになう。現実には「パ

ンセ」が描こうとする世界の欠如と、媒体となる言語の必然的になうそれと。一つ一つがある限定された、潜勢的な可能性をしか表現し得ない言語すらが、ここでは、或いはためらいつつ、或いは互いに協力しつつ記号の別個になう意味の複合によって、新たなイメージの世界を現出せしめる。何よりすぐれた天才の瀟洒を経て、ここに構築されたイメージの世界は、私たちを動かし、焦立たしめずにおかない。心情の方法とは、何より別の秩序に目を開かしめる愛の誘導なのである。パスカルが必死の身振りによって指示しようとする唯一の根源を、私たちは勿論見失ってはならないけれど、そこに到達せしめようとする方法的技巧としての「パンセ」のレトリックとエステティックは、あくまで応用学の問題として重要視されなくてはならない。既に M. J. Maggioni, M. Junco, J. Demorese 等により試みられたスタイルの研究は、豊かな成果を残しているが、個々の断章に即し、その意味内容とスタイルの相関性についてさらに厳密な考察の余地があるように思う。十分な用例によって例証し得ないことは残念であるが、パスカルにおいて概念はすべて具体化具象化の傾向をもつ文体的試みに支えられているのである。neant, rien, vide, ……等の語は、抽象的觀念でなく、その実名詞的性質の強化によって、私たちを圧倒する具象性を帯びている。「パンセ」の描写は、この迫真的な力をもつことによって、詩のイメージが実在の何らかの翳をさし示す暗示的内容をもつのに似て (cf. C. D. Lewis, *The Poetic Image*, 1951) 私たちにもっとも多くのことを示唆し、思い描かしめる。ただ、パスカルの方法が、あくまで愛によって触発された創造的活動であり、積極的な根源的「愛」への奉仕としてのわね (art) であったことは忘れてはならない。この世

界の晦さが大なるものであるかぎり、「パンセ」の世界の晦さは当然なのである。そのスタイルの不安の性質は、人間の現存在そのものが固有にもつ不安のイメージである。こうして、「パンセ」のすべての描写は、まさに噴火山上の危機的なアクトとして象徴されるような、はげしい緊迫感を以て私たちに迫る。「パンセ」の absence の深さが私たちを驚倒せしめ、その根底において私たちが Absence の唯一の意味に触れたとき、Presence は私たちの心情の眼に確かに見えてくるはずなのである (676)。(Le 4 mai, 1959.)